論　文　要　旨

論　文　題　目　　現代中国語における二重他動構文の研究

氏　名　　盧 建

本論の要旨と構成

本研究では、地域間の構文の違いに注目し、現代中国語の二重他動構文が、一つの言語の歴史の中で生じたものなのか、それとも言語接触の影響によって生まれたものなのか、という問題を分析した。研究方法としては、二重の他動関係を表す複数の構文（二重他動構文）を、「古代中国語－近代中国語－現代中国語」という通時的な座標軸と「西北方言－共通語(北京語）－東南方言」という共時的な座標軸から成る二次元の枠に位置づけ、二重他動構文の変遷とその動機づけを考察し、さらに、言語類型論を前提に、現代中国語の二重他動構文の構文的意味を分析した。

本文の構成は次のようになっている。

第1章　先行研究と本論の要旨
第2章　授受イメージの言語化とその文法的な方策
第3章　二重他動構文の変遷
第4章　東南方言の右分枝表現およびその構文の歴史的階層
第5章　西北方言の左分枝表現および言語の地域間浸透
第6章　東南方言と西北方言のハザマにある共通語
第7章　二重目的語構文の意味および認知心理的実験
第8章　結論

先行研究と問題提起

これまでの研究は主に形式に注目しながら二重目的語構文を考察しており、二重目的語構文の範囲を形式の面から定めることを考察の焦点としているものが多かった。先行研究の問題点は、次のようにまとめることができる。

①近年、二重の他動関係を表す二重目的語構文および与格構文などについて、構文同士の関わりを記述している研究は多く見られるが、考察の範囲、深さはいずれも十分とは言い難い。
②構文の生成と変遷に関するこれまでの研究は「異源（異なるみなもと）の影響・浸透」と

いう視点を欠いており、「中国語は純粋な言語体系をもっている」という理念が中国語の構文の変遷を解釈する上での基本前提となっている。

筆者は、自ら行った調査の結果から、このような基本前提が必ずしも正しいとは限らないと考えるに至った。

モノの授受というのは日常生活においてきわめて頻繁に観察されるコミュニケーション行為であり、授与と取得は互いに方向が異なる。そして、授受イメージは、中国語という一つの言語内において、さまざまな文法構造に投影されている。

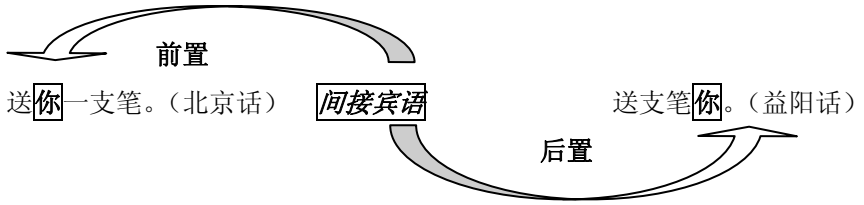
まず、注目したいのは、取得を表す表現形式が驚くほど一致している点であり、以下のような構文が用いられる。

動詞＋間接目的語＋直接目的語

一方、授与に関わる表現には多くの地域的な違いが見られ、共通語(北京語)、東南方言、西北方言を比較すると、授与を意味する二重他動構文の文法構造には以下のような対立関係と鏡像関係が見られる。

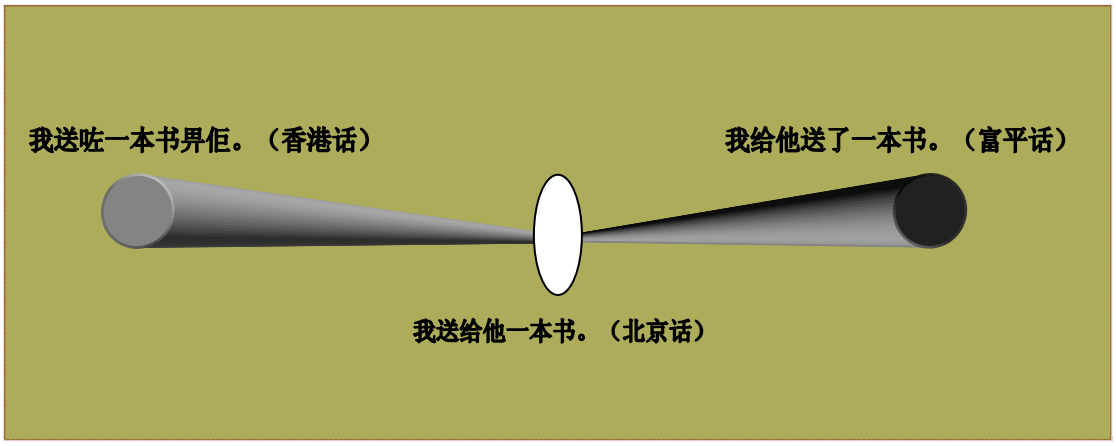
（1）二重目的語構文の対立

共通語（北京語）の二重目的語構文では、間接目的語は直接目的語の前に置かれるが、東南方言の土着語階層では、間接目的語は優先的に直接目的語の後に置かれている。



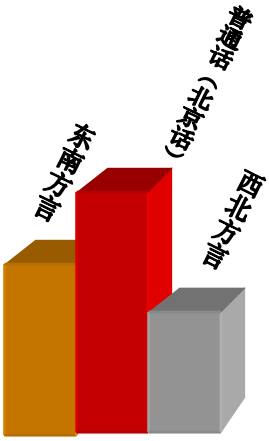
（2）授与構文の鏡像

授与を意味する二重他動構文の与格受取手の位置について、述語動詞を軸としてみた場合、東南方言では右の分枝が優先的に選ばれるのに対し、西北方言では左の分枝が選ばれる。一方、共通語（北京語）では与格受取手を述語動詞の直後に置く傾向が見られる。与格受取手の位置についていえば、三大地域は相補的な関係にある。



（３）構文の組み合わせと構文の数の違い

五種類の授与に関する二重他動構文のうち、共通語では四種類の文構造が観察できる。東南方言では、「前置詞+間接目的語+動詞+直接目的語」という構文は存在せず、「動詞+前置詞+間接目的語+直接目的語」も当該方言本来の文法構造ではなく、共通語の影響を受けた形式である。西北方言では、東南方言で用いられる「動詞+直接目的語＋前置詞／動詞+間接目的語」という形式はほとんど観察されず、さらに、授与の意味を表す二重目的語構文も無いようである。



結論と意義

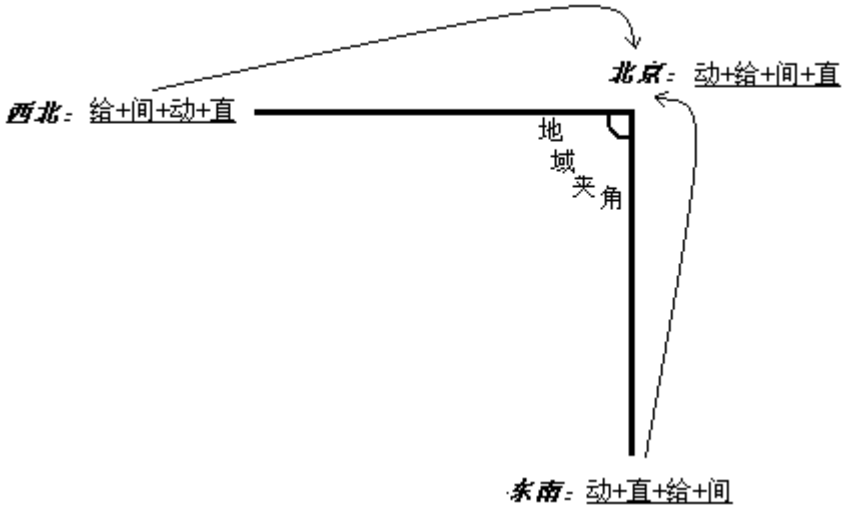
結論

1．共通語（北京語）と東南方言の二重目的語構文に見られる語順の面での対立は、歴史的な累積の結果である。中古より、南と北の二重他動表現は分岐の方向をたどってきた。授与義を表現する「動詞＋直接目的語＋間接目的語」の構造は徐々に北方表現から消えたが、南方にはその歴史的遺産が比較的多く残っている。したがって、「動詞+直接目的語+間接

２．与格受取手の分布の違いについて、中国語文法界では逐次前移の結果だと考えられてきた。

しかし、本研究の地理的、通時的な考察によって、東南方言、西北方言、共通語(北京語)のプロトタイプ的な授与義二重他動構文が互いに対立していることが明らかとなった。このことは中国語自身が必ずしも一次元の通時的な階層をもつものではないということを示しており、言語類型論的な価値がある。

３．言語の接触と言語自身の変遷が、共通語(北京語)の構文形式の多様性を生み出す要因になっていると考えられる。地理的な面について言えば、北京はおおよそ西北と東南の交わるところに位置している。今日の共通語(北京語)が独特でありながら慣用的であるという現状、すなわち動詞の直後に与格受取手を置く無標の特有の形式を持ちながら、有標の東南与格受取手後置型と西北与格受取手前置型を受け入れている共通語(北京語)の寛容さには、東南方言プレートと西北方言プレートによってプレスされた混合型の兆候が現れている。



意義

１．現代中国語の二重他動構文を、初めて、「古代中国語－近代中国語－現代中国語」という時間的な座標軸と「西北方言－共通語(北京方言)－東南方言」という空間的な座標軸の両方から成る二次元の枠に位置づけ、体系的な観察と考察を行った。そして、中国語二重他動構文自身の歴史的な変遷経路と軌跡を分析し、さらに、言語の接触と浸透が中国語二重他動構文に与えた影響を明らかにし、二重他動構文を「同一の源」をもつ構文と「異なる源」をもつ構文に分けた。

２．中国語内部で与格受取手が直接目的語の後ろから直接目的語の前に移り、さらに動詞の前に移ってきたと見なす先行研究に異議を唱え、地域を越えた中国語は同質の体系ではないことを主張した。文法の変遷は、必ずしも同質言語内で起こるわけではなく、そこには「構文の借用」、「構文の影響」という問題が存在しており、これまでの「単線的変化」理論の下で構築された変化のプロセスには再考の余地があることを明らかにした。

3. 中国語には三千年以上の文献史、豊富な方言および少数民族の言語がある。また、唐代以後契丹、女真、蒙古などの各民族が前後して中原に入ることによって、語族間の接触はさらに頻繁になり、「中国語の非『中国語』化」をいっそう強めた。本論文は中国語がもつ複雑性を明らかにし、現代中国語の構文に対する通時的・地域横断的な考察や語源解析の参考になる分析事例を提供しているように思われる。